土　岐　市　教　育　研　究　所
Ｔ　Ｅ　Ｌ　　0572-54-1111　(内374)
Ｆ　Ａ　Ｘ　　0572-55-6310
ﾒｰﾙｱﾄﾞﾚｽ　　kyoiku@city.toki.lg.jp
所　　報　　Ｎｏ．５７６
発行責任者　　所　長　西尾　実
発　行　日　　令和６年 ７月　１６日
題　　字　　長谷川　広和　教育長

『陶芸家への第一歩！』

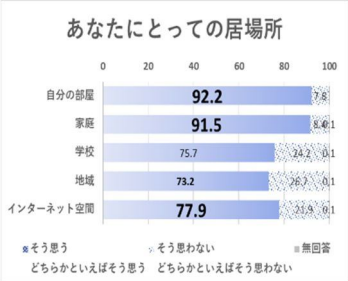
撮影　土岐津中学校
小川　正直　先生

# 「スクリーンタイム」

土岐市教育研究所長　西尾　実

電車に乗ると静けさに驚きます。一応にほぼ全ての人がじっとスマホの画面を凝視しています。雑談をしながら乗車してくる高齢の方は、車内で声を潜めてしまうほどです。ネットが普及する前は、夕方の電車内は、部活帰りの高校生が元気な声で談笑する光景がありましたが、今では、ほとんど見かけなくなりました。

右のグラフは、令和6年4月に行った土岐市子ども計画策定に関するアンケートで、市内小5・中2の児童・生徒対象に「あなたにとっての居場所（ほっとできる場所、居心地の良い場所など）」について答えた結果です。自分の部屋92.2％　家庭91.5％と、ここまでは良いですが、インターネット空間77.9％（令和4年の国の同じ調査結果は65.4％）という数字には、恐ろしさを感じてしまいます。もはや児童・生徒だけの問題ではありません。スマホやタブレットの普及により、小学生のスクリーンタイムは増えています。スポーツ庁が行った調査では、1日のスクリーンタイムが2時間を超える小学生男子は、2018年が57.4％だったのに対し、2021年は62.4％と増加しました。著書「スマホ脳」でアンデシュ・ハンセン氏は、精神科を受診する若者が急増したのは2010年から2016年。その時期に若者に起きた最大の変化、それはスマホからインターネットにアクセスできるようになったことだと述べています。また、東北大学の川島隆太教授によると、平均11歳の子ども223人の脳を3年間モニタリングした結果、スマホを含むネット漬けの子どもほど、思考や創造のほか、人の気持ちを理解したり、場の空気を読んだりするような高次なコミュニケーションをつかさどる前頭前野を中心に、脳が発達していないことが分かったと報告しています。




資料 土岐市子ども計画策定に関するアンケート(R6.4 月小5・中2)

スマホは快楽物質ドーパミンを増やす。つまり、見れば見るほどわくわくする状態になります。子どもの衝動を抑制する能力は未発達です。人が薬物やギャンブルに依存して段々と衝動性が高まっていくのは、ドーパミン神経細胞における情報伝達の乱れが要因の１つと言われますが、それほどの威力がスマホにはあるのです。だから、スティーブ・ジョブズやビルゲイツはじめ、IT企業のトップは子どものスクリーンタイムを厳しく制限していると言います。スクリーンタイム制限の設定は、保護者への協力を呼びかけるとともに、夏休みの計画に不可欠なものだと思います。

- 子どもが14歳になるまで携帯電話を持たせない
- 家族の食卓での使用を禁止する
- 就寝時間のかなり前から、デバイス使用を禁じる時間を設定する
- 平日については、スクリーンを見ていい時間を厳密に定める
- 使用を認めるソーシャルメディア・サービスを慎重に検討する
- 子どもが寝室でデバイスを使うことを禁止する

2017/10/29 英紙ガーディアン「ジョブズとゲイツがなぜテクノロジー使用を厳しく制限した理由」から

## 「デジタル依存と不登校支援」

不登校支援サポート　スダチ代表の小川 涼太郎氏は著書「不登校の９割は親が解決できる」で、親子関係の回復とデジタル制限の重要性について述べています。中でも不登校の子が再登校するまでの大きな壁は、やはりデジタル依存からの脱却です。そのために行う家庭のルール作りについて、著書の中で次のように示されています。

①学校に行かない日はスマホ等デジタル機器に一切触れない
②朝〇時に起きて夜〇時には布団に入る
③朝食と夕食は家族で一緒に食べる

できそうで、できそうにない家庭が多いと思いませんか。小川氏は不登校のお子さんが学校に行ってみようと思う条件に、正しい親子関係を築くことを強調しています。家庭の主導権を握るのは親です。「やるべきことやらないで好きなことだけやっていればいい」と教えてしまったら、将来、困るのは子どもです。子どもに寄り添うという言葉を、子どもの言いなりになると取り違えてしまうほど、不登校のお子さんを持つ保護者の方は、追い込まれています。保護者の方にとって、自分の子を見てくれている学校の先生の言葉は、大きなものです。夏休み前の懇談の折に、お子さんのデジタル依存について、保護者の方と話をしてみませんか。

# 公立幼稚園・こども園での新たなスタートに向けて

## ～幼児教育について考える～

土岐市幼稚園・こども園長会　会長　伊藤　策雄

今年度から、妻木幼稚園・つまぎ保育園と肥田幼稚園・ひだ保育園が一つになり、妻木こども園、肥田こども園となりました。また、他の市内すべての公立保育園はこども園となり、４つの幼稚園と８つのこども園での新たなスタートを切りました。

そんな新たな体制となった今、何が求められているのか考えていく必要があります。そこで今回は、現在の幼児教育の動向を小学校とのつながりも含めて紹介します。

**〈幼児教育をめぐる動向〉**

幼稚園では、岐阜県幼児教育アクションプラン【改訂版】「ぎふっこ」すこやかプラン『つなぐ・高める・支える』幼児教育の推進を受け取り組んでいます。取組の具体的な内容は次のようになっています。

**つなぐ：幼児教育と小学校教育をつなぐ取組の強化**

文部科学省では、令和４年度から３か年を念頭に「架け橋プログラム」の充実をめざし、モデル地域における実践を行い集中的に推進していこうと取り組んでいます。そのモデル地区が泉西小学校区です。すでに２年間の実践を終え成果をあげています。

しかし、まだまだ市内にその実践が広がっていない現状や交流は行っているが形式的な交流となっている現状があります。また、幼稚園とこども園・小学校の間にはまだまだ意識の違いが感じられます。今年度は市内全体で、幼稚園・こども園・小学校の教務主任が集まり６月に話し合いの場をもちました。これを契機に形だけのつながりではなく、幼児がスムーズに小学校に移行し、より力を発揮できるように、教育課程を編成してくことは勿論ですが、安心して園生活から学校生活へ移行できるような取組を考え、実践していく必要があると思います。

**高める：遊びを通した指導の充実と保育内容の評価・改善、教職員の資質及び専門性の向上**

幼稚園では、小中学校と同じように、園内研究を行い、教員の資質向上に向けて取り組んでいます。例えば、駄知幼稚園の研究テーマは「進んで表現し、楽しく遊ぶ子を目指して」です。遊びや園生活の中で、先生や友達と心を通わせ、経験したことや考えたことなど、自分の思いを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりする中で、言葉などを使って表現できる姿を目指します。さらに、言葉による伝え合いが、活動の広がりや深まり、仲間と折り合いをつける姿へと高まり、より楽しく遊び込むことができるように指導・支援を工夫して取り組む中で、資質の向上を図っています。

**支える：多様な幼児への支援の充実、家庭教育・子育て支援体制の整備**

「支える」の中でも、多様な幼児への支援については、数年前と比べ随分意識化が図られています。園児数は減少する中でも、支援の必要な幼児は年々増え、多様化していることが大きな課題となっています。土岐市においても知的面や情緒面で支援が必要な幼児のことは勿論、医療ケア児や外国人幼児の在籍など多様化する実態があります。こども家庭課や教育委員会の指導や助言を受けながら研修を行い、一人一人に合った対応を考えています。また、特別支援学校、療育センター、保健センター等とも連携を取り、支援を必要とする幼児に対する指導・支援は勿論、就学に向けても、一人一人の幼児にとって一番よいと思われる居場所を保護者と共に考え取り組んでいます。

最後に、これから大切にしていきたいことについて話します。まず、土岐市のよさである幼稚園が小学校に隣接している点を生かすこと。そして、こども園と小学校の連携を図ることが、ますます重要になってくること思います。そのためにも、幼稚園・こども園・小学校の先生同士が互いに足を運び、子ども達の姿を通して話し合い、連携を図ること。さらに、生活面・学習面で安心してできるような交流を計画的に行っていくことが大切だと考えます。

【校長室の窓から】

# 「よしやってみよう」と一歩踏み出す子ども達

肥田小学校長
水野　浩庫

## ◇はじめに

「よしやってみよう！」は、始業式で子ども達に伝えた言葉です。

第１回学校運営協議会の打ち合わせで、地域の方から次のような言葉がありました。

「昔から肥田の子は穏やかな性格ではあるが、やや自己表現が苦手である。」

ご自身も肥田で生まれ育ち大人になった今、肥田の子ども達を優しい目で見守りながらも、自信をもって自分の考えを表現できる大人になってほしいという思いをもってみえることが伝わってきました。

地域の方の思いも受け止めながら、優しく穏やかな肥田の子どもたちの良さを生かし、更に今の自分から一歩前へ足を踏み出すことができる姿となることを願い、今年度がスタートしました。

## ◇「人を大切にする力」

肥田小学校では授業中お互いの考えを伝えあったり教え合ったりする姿や、休み時間に上級生と下級生が一緒になって遊ぶ姿が見られます。

学校は仲間と活動し学び合う場です。小さな社会です。人と人が共に生活する中では、自分の思うようにいかなかったり仲間とのトラブルが起こったりします。そんな時は互いの思いを伝えあうことで、折り合いの付け方を学びます。相手の立場になって相手の思いを考えられる経験をすることで、社会の中で自分とは違った価値観をもつ人と関わる際、なくてはならない「人を大切にする力」が育まれます。人を思いやる気持ちは勇気につながり「よしやってみよう」という思いも生まれ、具体的に行動する姿となります。この姿こそ社会に出た時に必要となる姿です。

## ◇「ふろしき」の学校

「スーツケースに子どもを入れようとしている限り、誰一人取り残さない学校づくりはできない」と学校を例えて言われたのは、大阪市立大空小学校の初代校長、木村泰子さんです。「スーツケースに入れようとすると、長い棒のようなタイプの子どもならポキッと折らなければなりません。風船のようなタイプの子どもなら空気を抜かなければなりません。もはや、学校に子どもを合わせる時代ではないです。ふろしきのように柔軟に子どもに合わせる学校であるべきです。」と説明されています。

どの子にも良さはあります。その良さを職員一人一人が各々のふろしきを広げ、つなぎ合わせ柔軟に対応することの大切さを説いています。「スーツケースではなく、ふろしきの学校」であれば、どの子も安心して「よしやってみよう」という思いが湧き上がってきます。

## ◇相手を受け入れる

肥田小学校は長年、特別支援学校と学校間交流を行っています。職員同士が事前に打ち合わせを行い、子ども達も活動内容を話し合い計画しての実施でした。ワクワクする気持ちもあった反面、久々に直接会って関わる交流だからうまくできるかな？初めて会う子と仲良く活動ができるかな？という不安もあった子ども達でした。しかし、実際に会って活動する中でお互いのことが分かり合え、楽しく充実した時間となりました。

「友だちになれてうれしい」「ありがとう」
「また会おうね」「なかよしでいようね」

等々、交流後の子ども達の感想からは、一緒に過ごす中でお互いのことを自然に受け入れていることが伝わってきます。

交流後６年生の子は「違いはあるけど同じように楽しめました。お互いの思いや立場に立った心づかいが大切だと分かりました。」と自分の思いを伝えてくれました。また「誰もが安心できる環境を作ること」が大切であることにも気付きました。

人との関りがこんなにも子ども達に多くの気付きと成長をもたらすことに深く感動するとともに、子ども達一人一人がそれぞれの「ふろしき」を広げ、お互いを包み込んでいることが伝わってきます。そんな安心した中であったからこそ、学校間交流では相手に関わろうとする姿が多く見いだされたと思います。

## ◇おわりに

思いやりの心をもち、人を大切にしながら「よしやってみよう」と一歩踏み出す子ども達のために、職員一人一人がふろしきを広げ子どもの思いを受け止める学校でありたいです。

# 令和６年度　学力向上推進委員会　活動方針と計画

## １　目的

教育委員会の諮問に応じて，学力向上に向けた事項を調査・審議する。

## ２　活動方針

（１）学力向上に向けた授業改善を中心にして，各校の取組を審議する。
（２）調査・審議された事項を整理し，教育委員会に報告するとともに，校長会等に報告，進言する。

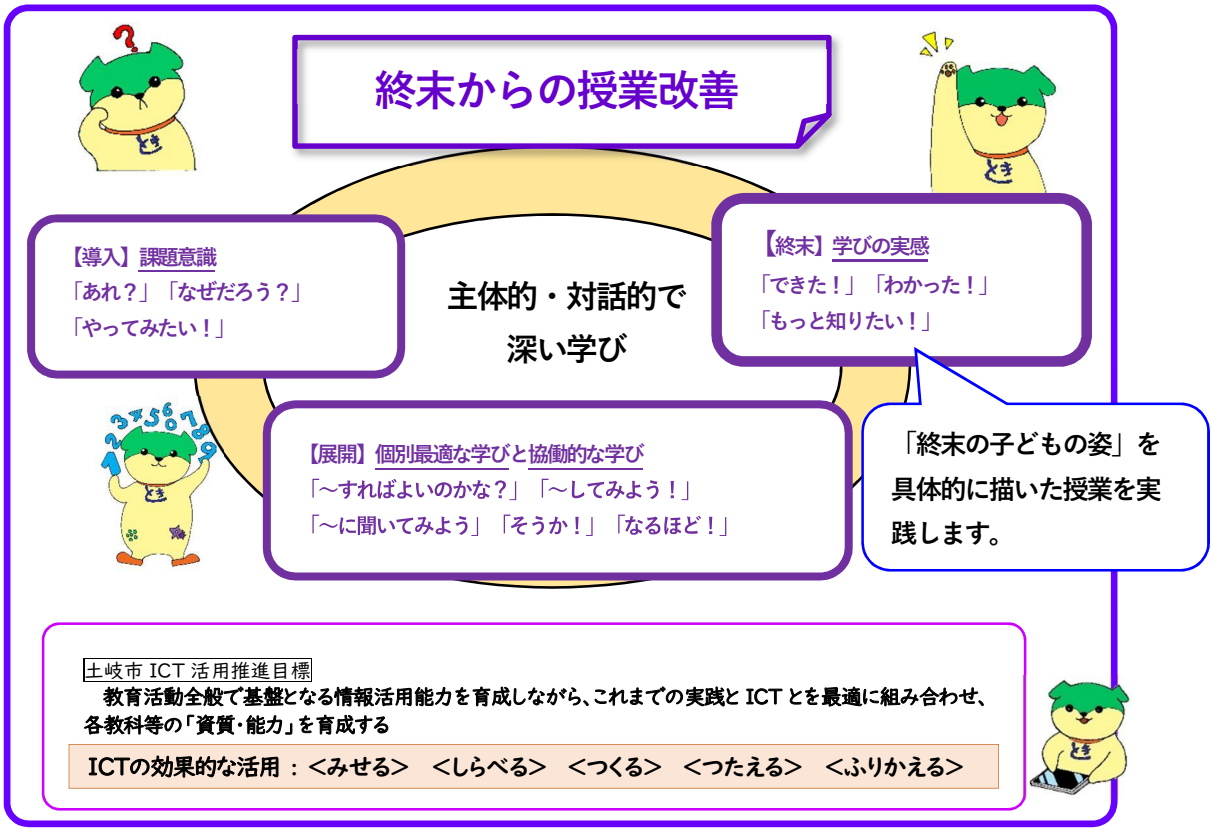
## ３　構成員

【顧問校長】　　泉西小　有賀　雅美（校長）
【学力向上推進委員】

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 土岐津小 | 道下 | 容子 | 下石小 | 塚本 | 幸代 | 妻木小 | 竹澤 | 弘一郎 |
| 濃南小・中 | 西 | 雅昭 | 駄知小 | 佐々木 | 美樹 | 肥田小 | 橋本 | 梨々子 |
| 泉小 | 仙石 | 健太 | 泉西小 | 道下 | 直矢 | 土岐津中 | 水野 | 剛 |
| 西陵中 | 春田 | 剛史 | 駄知中 | 福富 | 泰地 | 肥田中 | 野田 | 大貴 |
| 泉中 | 江﨑 | 紀子 | | | | | | |

## ４　令和６年度　土岐市学力向上推進委員会の取組

授業の出口における子どもの姿から構想する「終末からの授業改善」を行います。



## 「終末からの授業改善実践シート」を使って終末の児童生徒の姿を具体的に描き、教師の手立ての有効性を検証します

| 自校の研究主題 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 自校の重点内容 | 教科・領域 | 単元名 | 学年 | 実施日 | 授業者 |
| | | | | | |
| **終末の児童生徒の姿**<br>どんな活動や学習を通して、　「何が分かる。」<br>「何ができるようになるのか。」 | | | | | |

**ポイント１**
ここから授業を組み立てます。

【導入】課題意識
（1）願う 児童生徒の姿（意識・発言）
・
課題
（2）教師の手立て
①
②
（3）実践した手立ての有効性について（〇有効　●要改善）

【展開】個別最適な学びと協働的な学び
（1）願う児童生徒の姿　（意識・発言）
・
（2）教師の手立て
①
②
（3）実践した手立ての有効性について（〇有効　●要改善）

【終末】学びの実感
（1）願う 児童生徒の姿（意識・発言）
・
（2）教師の手立て
①
②
（3）実践した手立ての有効性について（〇有効　●要改善）

**ポイント２**
研究会等で、教師の手立ての有効性について検証します。

「終末の児童生徒の姿」を具体的に描いた授業を実践します。導入・展開・終末それぞれの場面で「願う児童生徒の姿」そのための「教師の手立て」を明らかにした授業を実践していきます。

土岐市　幼稚園、小・中学校

# ニューフェイスの紹介

**※今年度、４月より土岐市へ着任した新規採用者の皆さんを紹介します。**
**大学を卒業して初めて教師として歩み始めた先生、何年も経験を積み重ね採用された先生です。**
**今、どのような想いで教壇に立ってみえるのでしょうか。**

◆濃南小学校

**安形　花菜　先生**

毎日子ども達の成長や頑張りに喜びを感じ、子ども達とともに自分も学び成長していきたいという想いで過ごしています。子どもの良い姿や頑張りに気づき、それを個人やクラスに伝え、喜ぶ姿やさらに頑張ろうとする姿を見ると嬉しくなり、やりがいを感じます。専門の算数では、「できるようになりたい。」「わかってうれしい。」という気持ちを引き出せる授業ができるように努めています。

◆西陵中学校

**沖村　咲来　先生**

４月から西陵中学校に赴任し、生徒の成長や頑張りを一緒に喜びながら毎日過ごしています。授業では、生徒とともに考えながら、「もっといい合唱にしたい」「こんなふうに歌えるようになりたい」という想いを引き出し、全員がわかる授業づくりを目指して、日々努めています。生徒に寄り添い、良さや素敵な姿を伝え、安心して過ごせる環境を作れるよう努めていきます。

◆西陵中学校

**森本　貴紀　先生**

４月から西陵中学校に赴任し、お世話になっております。この２ヵ月弱の学校生活で、子どもたちが成長する姿をたくさん見つけてきました。この仕事のやりがいを強く感じていると同時に、自分もより良い教師を目指して成長していこうという決意に満ちています。とにかく実践、経験をすることを目標に努力を重ねていこうと思います。よろしくお願いいたします。

◆土岐津小学校附属幼稚園

五島　ゆい　先生

自分の生まれ育った土岐市で、毎日成長する子どもたちを近くで見守る仕事にやりがいを感じています。子どもたちの「やってみたい」という気持ちに寄り添い、私も一緒になって遊び、楽しめるようにしています。今後も子どもたちが夢中になって楽しめるような環境構成や援助は何かを考えたり、先輩の先生方に教えていただいたりして保育の引き出しを増やしていきたいです。

◆泉小学校附属幼稚園

大東　美月　先生

子ども達の笑顔や元気な姿からパワーをもらい、毎日楽しく過ごしています。

子ども達一人一人の気持ちに寄り添いながら丁寧に関わること、“楽しそう”“やってみたい”の気持ちを大切にすることを心掛けながら保育をしています。

周りの先生方や子ども達からたくさんのことを学び、一生懸命に挑戦する一年間にしていきたいです。よろしくお願いします。

◆泉小学校附属幼稚園

大加　ひな　先生

４月から幼稚園教諭として働き、子ども達のがんばる姿や全力で楽しむ姿を近くで見ることができ、毎日パワーをもらっています。

子ども一人一人の気持ちを大切に寄り添うことができる保育を目指していきます。

園の先生方を見習い、少しでも早く一人前の教師、保育士になれるように向上心をもってがんばります。よろしくお願いします。

**土岐市初任者研修**

**「研修Ⅰ」７月２６日（金）**

〇教師としての心構えについて

〇地域における豊かな社会性を育む研修Ⅰ（社会体験研修）

**「研修Ⅱ」１２月３日（火）**

〇地域における豊かな社会性を育む研修Ⅱ（幼稚園・こども園体験研修）

**「研修Ⅲ」１月２１日（火）**

〇研修のまとめ

「心にひびく言葉」

# 「　お　前　で　、　こ　れ　か　」

西陵中学校　教頭　小池　智明

体は、食べたもので作られる

心は、聴いた言葉で作られる

未来は、発した言葉で作られる

私には、これらの言葉を耳にしたり思い出したりするたびに、自身の言動を振り返り、戒める癖があります。

私は、母から叱られたという記憶がありません。否定するような言葉を掛けられたことがないとも言えます。そして、美術教師になろうと思った私の心を作ったのも、母の言葉です。

「あなたの描く絵は素敵やね。今日もまた友達に自慢してまったわ。」

度々私に向けて発せられるこの言葉は、幼いころから聞き続けてきたように思います。一方で、自分の描いた絵を後になって見返してみると、「適当なことを言っていたのかな？」と思えるほど素敵でもないと感じることがあります。

学生時代、割と自信をもって美術の世界に入り込みました。予想通り、しばしば鼻っ柱をへし折られる経験をしました。自信があっただけに、落差は激しいものでした。

ある日、指導教官に課題を提出しに行ったときのことです。何度提出しても受け取ってもらえず、全く自信のない中恐る恐る作品を渡すと…。

「あれ？お前で、これか。こんなもんか？」

それ以外には、何も具体的な改善点、目標は言われません。しかし、妙に「何とかしたい」という思いが強まっていくのでした。

人には、生まれてから経験してきたそれぞれの人生で、浴びせかけられた言葉があります。その言葉たちの組み合わせで、その人の人生の土台が作られていくのだと感じます。そうであるならば、私の、今発している言葉が、聞いた人たちの人生の土台を作っているのだと、身の引き締まる思いでいます。

## 掲　示　板

### 令和６年度　東濃地区教育推進協議会教育実践研究奨励賞「実践記録、教材、教具の部」の募集について

【応募資格】

・東濃教育事務所管内の教職員「校長、教頭、教諭（講師、養護助教諭等を含む）、養護教諭、事務職員、栄養教諭・学校栄養職員」

【応募方法】

・令和５年度から令和６年度に作成または使用したもので、未発表のものを応募する。

・土岐市の小中学校の部においては　９月１７日（火）までに　※小中共に、学校単位で「出品一覧」を教育研究所にメールで提出する。

【審査】

・１０月２１日に小学校の部及び中学校の部の審査を行う。

【展示】

・小学校の部：１０月２２日（火）多治見市立精華小学校

・中学校の部：１１月１２日（火）恵那市立恵那西中学校

多くの先生の応募を、お待ちしております！